

南宋包恢の陸九淵評価：「象山先生年譜序」（他二篇）精読 Bao Hui's Evaluation of Lu Jiuyuan: The Reading of *Xiangshan Xiansheng Nianpu Xu*

中嶋 諒
NAKAJIMA Ryo

日本語要旨

本稿は、南宋後期に活躍した、いわゆる「朱陸折衷」論者の一人である包恢に着目し、その陸九淵評価について考察したものである。具体的には、まずは包恢の文集『敝帚稿略』の中から、直接陸九淵に言及した「象山先生年譜序」、「跋象山先生二帖」、「陸象山先生賛」の三篇の文章を精読することを試みた。そしてこれらの作業を通じて、①陸九淵自身に進歩を求める姿勢があったことを確認し、②当時一般的であった学問や教育を軽視した陸九淵像の見直しを図るという包恢の意図を明らかにした。また併せて、陸九淵研究の基礎資料である「象山先生年譜」の編纂者が、包恢やその父包揚と関係の深い李溥という人物であったことも指摘した。

1. はじめに

中国南宋前期に生きた朱熹（朱子、1130～1200）は、その論敵として知られる陸九淵（象山、1139～1192）と直接に、あるいは長大な書簡をもって激しい論争を繰り広げた。けれども南宋後期、彼らの再伝の弟子たちが活躍した時代においては、かえって朱陸双方の思想を接近させていこうとする、いわゆる「朱陸折衷」と称される思想潮流が現れた。例えば陸九淵の高弟楊簡（慈湖、1141～1226）に師事した錢時（融堂、1175～1244）は、「朱陸折衷」論者の代表格とされる⁽¹⁾。さらに朱子学を宗とした真徳秀（西山、1178～1235）も、若年には楊簡の教えを受けており、その思想にはまた陸学的傾向が窺えるとする見方もある⁽²⁾。

本稿で取り上げる包恢（宏斎、1182～1268）も、「朱陸折衷」を体現した思想家であった⁽³⁾。包恢の「朱陸折衷」論について、筆者はかつて簡介したことがあるが、本稿はその「朱陸折衷」論のうち、「陸（九淵）」の側面に対して、より精密な考察を加えていく。包恢には文集『敝帚稿略』8巻が現存するが、陸九淵に直接言及したものとして、該書巻3所収の「象山先生年譜序」、及び巻5所収の「跋象山先生二帖」、「陸象山先生賛」があるので、まずはこれらを精読することを試みたい⁽⁴⁾。

ところで包恢の著述は、もと『敝帚集』5冊としてまとめられていたようだが現存しない。いま『四庫全書』に収める『敝帚稿略』8巻は、『永楽大典』所収の包恢の文70余篇、詩80余篇を新たにまとめ直したものであるという（『四庫全書総目』巻163、別集類16）。

なお『四庫全書』が底本としたとされる清乾隆翰林院鈔本は中国国家図書館に所蔵され、その影印はいま四川大学古籍整理研究所編『宋集珍本叢刊』第78冊（線装書局、2004年7月）に見ることができる。また静嘉堂文庫には、陸心源（存齋、1838～1894）十万卷楼旧蔵の『敝帚稿略』8巻が収められるが、これは浙江杭州の『文瀾閣四庫全書』の伝抄本であるという。さらに民国9年（1920）、李之鼎（振堂、?～1928）が刊行した叢書『宋人集』丙集にも、『敝帚稿略』8巻は採録されるが、「摠伝鈔四庫本」とあることから、これもまた『四庫全書』にかかわるものであるといえよう。なおその他、「象山先生文集序」については、李紱（穆堂、1675～1750）が増訂重刊した『象山先生年譜』の巻首にも収録される。これは上述した諸本と比べて、かなりの異同が見られる。これが包恢その人の文章の原形を留めたものなのか、あるいは後人の手が相当に加えられたものなのかは未詳であるが、もしも後者であったとしても、その解釈の一助となると考えて、煩を省みずに校異を示すこととした。

〔注〕

- (1) 銭時については、まずは石田和夫氏「銭融堂について 陸学伝承の一形態」（『中国哲学論集』2、1976年10月）を参照。また拙稿「陸学の「人心」「道心」論 いわゆる「朱陸折衷」の淵源を辿る」（『言語 文化 社会』15、2017年3月）でも触れた。
- (2) 福田殖氏「朱子学の伝来と李退溪（滉）の朱子学の特色」（『年報朝鮮学』3、1993年3月／のち『日本と朝鮮の朱子学』（福田殖著作選2）、研文出版、2016年10月、28頁）。
- (3) 拙稿「南宋包恢の「朱陸折衷」論」（『新しい漢字漢文教育』65、2017年11月）。
- (4) 包恢の文集については、祝尚書氏『宋人別集叙録』（中華書局、1999年11月）所収の「敝帚稿略」（下・1286頁）、及び李勇先氏「敝帚稿略」（『宋集珍本叢刊』第78冊所載の解題）などに詳しい。

2. 「象山先生年譜序」精読

【凡例】

・底本には清乾隆翰林院鈔本（『宋集珍本叢刊』第78冊、線装書局、2004年7月）を用い、以下の諸本との校異を示した。ただし煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。

文淵閣四庫全書本（台湾商務印書館景印、第1178冊、1986年3月）

文瀾閣伝抄本（静嘉堂文庫所蔵、陸心源十万卷楼旧蔵本）

宋人集丙編本（民国9年李之鼎宜秋館、摠伝鈔四庫本刊本）

李紱『象山先生年譜』（清雍正10年依宋本増訂重刊本、『宋人年譜叢刊』第10冊、四川大学出版社、（2003年1月）所収の「象山先生年譜後序」）

なお校異においては、それぞれ「文淵庫本」、「静嘉堂本」、「宋人集本」、「李紱年譜」の略称を使用した。

- ・解釈には、『全宋文』(上海辞書出版社、2006年5月)所収の「包恢」巻(第319～320冊、巻7328～7335、王曉波氏校点)の評点などを参照した。
- ・訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。なお注釈の引用文中や通釈で()を附したのは、訳者の補注である。また[]は、原文に附された小字注、または割注にあたる。なお原文・校異は基本的に本字を用いたが、注釈・通釈では新字を使用した。
- ・注釈において、『象山先生文集』(『象山先生全集』巻1～32にあたる)、『象山先生語録』(上が『全集』巻34に、下が『全集』巻35にあたる)、『象山先生年譜』(『全集』巻36にあたる)を引用する場合には、それぞれ「文集」、「語録」、「年譜」の略称を用いた。また引用に際しては、『陸九淵集』(中華書局、1980年1月)を使用し、その頁数を併記した。

象山先生年譜序^a

文安陸先生之學、偉然立卓、其遺文大畧可觀矣。而未有年譜可以參考其始終之條理、非缺典乎。^b有金谿李君子原遡其淵源、緝而成編、粗若明備、恨久而未有鉅梓^d以傳者。今年秋、臨川謝使君奕楸^c一見而慨然刻之郡齋、以補其缺典、以與文集竝行、使學者得而觀之、猶髣髴如見其平生而親炙之、豈曰小補之哉。^j刻成、命某爲之志其本末於後、再三辭不獲、乃僭越而言曰、孟氏之後千五百年、能自得師、大明此學、而因其歷年之先後、以紀其始終之條理、與世之所謂譜者異矣。^k

[校異]

a 序…李絳年譜、「後序」に作る。 b 有…李絳年譜、此の字無し。 c 原…李絳年譜、「愿」に作る。 d 梓…李絳年譜、「木」に作る。 e 臨川…李絳年譜、此の2字の前に「方得」が入る。 f 一見而慨然…李絳年譜、此の5字無し。 g 齋…李絳年譜、此の字無し。 h 以補其缺典…李絳年譜、此の5字無し。 i 竝行…李絳年譜、此の2字の後に「及冬、又知衡山黃令君應龍得邑士劉君林、已刻行矣。其間稍有增損、似去取詳略之尤宜。未缺之數十年、而補之於一旦、且彼此不約而成、殆山川之靈協相斯文也」が入る。 j 刻成…李絳年譜、「恢例承嘉」に作る。 k 某…李絳年譜、「俾」に作る。 l 再三辭不獲…李絳年譜、此の5字無し。 m 乃…李絳年譜、「懼」に作る。 n 而言曰…李絳年譜、「不敢。然前既辭臨川不獲而冒昧爲之矣、今此同一譜、亦何異辭、敢以復臨川者、還以復衡山可乎。蓋」に作る。 o 紀…李絳年譜、「計」に作る。 p 矣…李絳年譜、此の字無し。

[注釈]

- (1) 其遺文～可觀矣…陸九淵の遺文は、長子陸持之によってまとめられ、開禧元年(1205)に高弟袁燮によって『象山先生文集』32巻として刊行された。その後も嘉定13年(1220)に陳孫喜によって、紹定4年(1231)に袁甫(袁燮の次子)によって立て続けに出版されている。『象山先生文集』の編纂、刊行については拙著『陸九淵と陳亮 朱熹論敵の思想研究』(早稲田大学出版部、2014年10月)の第二部「『象山先生文集』の諸本について」を参照。

- (2) 李君子原…李溥 (1167～1243)、字は子原 (また子源)、江西盱江の人。自ら牧坡と号し、世に隱者として知られていた。かつて包恢の父包揚に師事し、その死に際しては包恢が墓誌銘 (『敝帚稿略』巻6、「李牧坡墓誌銘」) を寄せている。その銘に「盱江有自号曰牧坡者、姓李、諱溥、字子源、隱君也。……始從鄉之克堂包 (揚) 公遊。……一日忽悠然而逝、庶幾乎考終命者。時淳祐癸卯 (3年／1243) 五月一日也、歳年七十有七、聞者孰不傷之」とある。
- (3) 今年…宝祐4年 (1256)、包恢65歳の年を指す。底本には、この文章の成立年の記載はないが、李紱『象山先生年譜』所載の末尾には「宝祐丙辰 (4年) 仲冬朔、後学包恢拜手敬書」とある。
- (4) 謝使君奕楸…謝奕楸、また謝奕懋とも。その詳しい事跡は未詳だが、この序の著された宝祐4年 (1256) から、翌5年にかけて、謝奕楸は知撫州の任にあった (李之亮氏『宋兩江郡守易替考』、巴蜀書社、2001年5月／502頁)。なお使君は、地方官の尊称である。
- (5) 能自得師…「年譜」紹熙4年 (1193／516頁) 条に引く詹阜民の祭文に「孟軻親受、厥緒是承、卓哉先生、能自得師、其玩遺編、独識其微」とある。なお「能自得師」は『尚書』仲虺之誥に「能自得師者王、謂人莫己若者亡」とあるのを踏まえる。このように陸九淵は孟子を尊崇し、自らその継承者であることを自任していた。他に「語録」下・338条、詹阜民録／471頁 (「年譜」淳熙12年 (1185・先生47歳) 条とほぼ同一記事／498頁) に「某嘗問、先生之学亦有所受乎。曰、因讀孟子而自得之」とあり、また「文集」巻11 (「与路彦彬」／134頁) にも「区区之学、自謂孟子之後至是而始一明也」とある。

〔通釈〕

象山先生年譜序

陸文安 (九淵) 先生の学は、抜きんでて優れており、その遺文はおおむね目にすることができる。しかしその先後を筋道立てて参照できる年譜がなくては、拠りどころを欠くのではないか。江西金谿の李溥 (子原) が、その淵源に遡って編集した年譜は、ほぼ不備はなかったが、残念なことに、長きにわたり上梓して世に伝える者がいなかった。

今年 (宝祐4年／1256) の秋、江西臨川の謝奕楸が、この年譜を目にするや奮い立ち、赴任先の (江西撫州の) 居所にて刊刻し、(年譜がないという) 拠りどころの欠を補って、『(象山先生) 文集』と併せて刊行した。学ぶ者たちが閲読し、ありありと (陸先生の) 平生の様子をうかがい、親しく接して感化を受けるがごとくにしえたことは (大益であつて)、僅かながらの益であるといえるであろうか。(版木が) 彫り終わると、(謝奕楸は) 私にその顛末を (「年譜」の) 末尾に記すように命じた。私は再三辞退したが許されず、そこで僭越ながらもこう言った。孟子の後、1500年を経て、(陸先生は) 自ら (孟子と

いう)師を探しあて、大いにこの学を明らかにすることができた。年月の先後に基づいて、その終始(陸先生の学の展開)を筋道立てて記載している(この「年譜」)は、世にいうところの年譜とは一線を画するものであろう。

先生生於紹興己未^a迄乾淳^b五十餘年^c間、時則上有高宗孝宗爲明君師、而當年國家治道之所以興隆、人心之所以興起者、正由此學之明爾^d。孰主張是、孰綱維是⁽¹⁾。先生殆若特爲此學而生者、發揮啓迪、開闢充拓^e之功大矣^f。試觀其譜、其爲人品器之高也、則天鍾之而清明在躬⁽²⁾、人尊之而志氣如神⁽³⁾。自其兒時⁽⁴⁾、已如成人。三四歲能思天地窮際、至忘寢食。十三歲因解宇宙二字、忽大有省⁽⁵⁾。凡遇事物、動有感悟。嘗聞鼓聲、豁然以覺⁽⁶⁾。十七歲作大人詩以見志⁽⁷⁾。昔人以千人爲英、萬人爲傑、以其年考之、若先生超越世表、其英傑之尤者乎。

〔校異〕

a 迄…李絳年譜、此の字無し。 b 五十餘…李絳年譜、「之」に作る。 c 間…李絳年譜、此の字無し。 d 爾…李絳年譜、「耳」に作る。 e 闢…李絳年譜、「闔」に作る。 f 拓…宋人集本、「擴」に作る。 g 矣…宋人集本、「哉」に作る。 h 器…文淵庫本・李絳年譜、此の字の後に「識」が入る。 i 鍾…静嘉堂本、「鐘」に作る。 j 萬人爲傑…李絳年譜、此の4字無し。 k 先生…李絳年譜、此の2字の後に「者」が入る。

〔注釈〕

- (1)孰主張是、孰綱維是…『莊子』天運に「天其運乎、地其処乎、日月其争於所乎。孰主張是、孰維綱是、孰居無事推而行是」とある。
- (2)清明在躬・志氣如神…『礼記』孔子問居に「清明在躬、氣志如神、嗜欲將至、有開必先」とある。
- (3)自其兒時、已如成人…「年譜」紹興12年(1142・先生4歳／481頁)条に「静重如成人」とある。
- (4)三四歳～忽大有省…「年譜」紹興12年(1142・先生4歳／481頁)条に「常侍宣教公(陸九淵の父、陸賀を指す)行、遇事物必致問。一日、忽問天地何所窮際、公笑而不答、遂深思至忘寢食」とあり、また紹興21年(1151・先生13歳／482頁)条に「先生自三四歳時、思天地何所窮際不得、至於不食。宣教公呵之、遂姑置、而胸中之疑終在。後十余歳、因誦古書至宇宙二字、解者(『文子』自然・『淮南子』齊俗訓などを指す)曰、四方上下曰宇、往古來今日宙。忽大省曰……」とある。
- (5)凡遇事物～豁然以覺…「年譜」紹興16年(1146・先生8歳／482頁)条に「梭山(陸九淵の4兄、陸九韶を指す)嘗云、子静弟高明、自幼已不同、遇事逐物皆有省發。嘗聞鼓聲振動窗櫺、亦豁然有覺……」とある。
- (6)十七歳作大人詩…「年譜」紹興25年(1155・先生17歳／484頁)条に「作大人詩[見前卷二十五]」とある。なお『陸九淵集』(中華書局、1980年1月)の鍾哲氏の評点では、

「大人詩」は書篇名とされるが、「文集」巻25に「大人詩」と題するものは収められていない。あるいは単に“大人物の詩”、あるいは“大人びた詩”という意か。郭齊家・顧春氏「《陸九淵集》諸篇目写作年代考弁」（『陸九淵教育思想研究』、江西教育出版社、1996年10月、所収／349頁）は、これを巻25所収の「少時作」（299頁）を指すと解釈する。

- (7)千人爲英、萬人爲傑…千人を「英」、万人を「傑」とする典拠は未詳だが、類似的表現として、例えば『春秋繁露』爵国に「万人者曰英、千人者曰俊、百人者曰傑、十人者曰豪」とあり、『淮南子』泰族訓に「知過万人者謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之豪、十人者謂之傑」などとある。

〔通釈〕

（陸）先生がお生まれになった紹興己未（9年／1139）の年より、乾道（1165～1173）、淳熙（1174～1189）までの50年あまり、ときに高宗（在位1127～1162）、孝宗皇帝（在位1162～1189）が明君としてあらせられた。当時において、国家治道が隆盛し、人心が興起したのは、まさに学が明らかであったからに尽きる。それでは何ものが（この学を）主張し、何ものが（この学を）秩序づけたのであろうか。（陸）先生は、まことにこの学のために生まれてきた者であり、（人々を）教導し奮起させ、啓発し拡充させた功績は偉大であった。

試みに「年譜」を紐解くに、（陸先生の）人品や才徳の高邁さは、天が集めた清明さをその身に備え、人々が尊ぶ志気は神のごときであった。（陸先生は）幼少の時分より、すでに成人のようであった。3、4歳には、天地の果てについて思索し、寝食を忘れるに至った。13歳には、「宇宙」の2字の解釈によって、にわかには大悟した。いったい（陸先生は）物事に遭遇しては、それに感応して悟り、かつて鼓の音を聞いては、すっきりと悟ったこともあったという。17歳には大人の詩を詠じ、その志をあらわにした。古人は「千人（に一人の逸材）を英とし、万人（に一人の逸材）を傑とする」といったが、「年譜」を鑑みるに、陸先生は世の模範として人並みはずれた、英傑の最たるものであろう。

其自課^a已學之進也、則謂^b疇昔自反⁽¹⁾、灼見^c善非外鑠、徒以交物有蔽、自此大發愧恥、鞭策^d駑鈍、不敢自棄。或於踐履未能純一無間、稍知警策、即與天地相似⁽³⁾。其於執事之敬、嘗大進於掌家事之時。日用之功、實有在於人情物理事勢之間。深思力考、究極精詳、必造於昭然而不可昧、確然而不可移。以其言^g考之、可謂學不厭矣。其開發學者之盛也、在家則遠近聞風來學、而中情者或至汗下。在白鹿則剖決義利著明、而動心者或至流涕。在浙則從游多俊傑、咸聽言而感發⁽⁹⁾。在象山則學徒益大集、皆聞教而屈服。至若以書講明、則又無處無時無之。各隨其資以切琢之、不局於一方。各因其病以鍼砭之、不拘於一藥。莫不明白洞達、深切痛快、如鋒直破的、如刃解中節、使人心開目明、猶醉之醒寐之寤者、其感應神速^k。也以其言ⁱ考之、可謂教不倦矣。

〔校異〕

a 課…宋人集本、「述」に作る。 b 疇昔～其於…李紱年譜、此の52字無し。 c 灼…底本・諸本ともに「約」に作るが、引用元の「文集」巻3、「与諸葛受之」(45頁)に拠って「灼」に改めた。 d 事…李紱年譜、此の字無し。 e 詳…静嘉堂本、「祥」に作る。 f 不可移…李紱年譜、此の3字の後に「或於踐履未能純一無間、稍加警策、即與天地相似」が入る。 g 言…李紱年譜、「年」に作る。 h 決…李紱年譜、「判」に作る。 i 以…李紱年譜、「而」に作る。 j 局…李紱年譜、「拘」に作る。 k 也…李紱年譜、此の字無し。
l 言…李紱年譜、「年」に作る。

〔注釈〕

- (1) 疇昔自反～不敢自棄…「文集」巻3、「与諸葛受之」(45頁)に「誠以疇昔親炙師友之次、実深切自反、灼見善非外鑠、徒以交物有蔽、淪胥以亡、大発愧恥。自此鞭策驚蹇、不敢自棄」とある。
- (2) 於踐履～天地相似…「年譜」紹興22年(1152・先生14歳／483頁)条に「吾於踐履未能純一、然才自警策、便与天地相似」とある。
- (3) 其於執事～家事之時…「年譜」紹興32年(1162・先生24歳／485頁)条に「吾家合族而食、每輪差子弟掌庫二年、某適當其職、所学大進、這方是執事敬」とあり、同一記事は、「語録」下・204条(嚴松録／428頁)にも見える。なお「執事敬」は、『論語』子路に見える句である。
- (4) 日用之功～事勢之間…「年譜」紹興32年(1162・先生24歳／485頁)条に「復齋家兄(陸九淵の5兄、陸九齡を指す)一日問曰、吾弟今在何処做工夫。某答曰、在人情事勢物理上做工夫」とある。
- (5) 深思力考～不可移…「文集」巻17、「与致政兄」(218頁)に「若其深思力考、究事理之精詳、造於昭然而不可味、確然而不可移、則窃自信其有一日之長」とある。
- (6) 在家～至汗下…「年譜」乾道8年(1172・先生34歳／488頁)条に「秋七月十六日至家、遠近風聞来親炙」とあり、また同箇所引く包揚(顕道)宛の書簡に「蓋先生深知学者心術之微、言中其情或至汗下」とある。
- (7) 在白鹿～至流涕…「文集」巻23、「白鹿洞書院論語講義」(275頁)を指す。淳熙8年(1181・先生43歳)、陸九淵は江西江州の白鹿洞書院にて、『論語』里仁の「子曰、君子喻於義、小人喻於利」章の講義をした。同年の「年譜」記事(493頁)に拠れば「當時得来痛快、至有流涕者」であったという。
- (8) 在浙～言而感發…「年譜」乾道8年(1172・先生34歳／487頁)条に「在行都、諸賢從游」などとあるのを指すか。この年に陸九淵は科挙に登第し、浙江臨安(行都)に赴いたが、そこで楊簡、袁燮らいわゆる甬上四先生らと親交を深めた。また楊簡「象山先生行状」(『陸九淵集』巻33、所収／389頁)に、「其始至行都、一時俊傑咸從之游」云々とある。

- (9) 在象山～教而屈服…「年譜」淳熙15年（1188・先生50歳／501頁）条に「在山間（象山）精舎……郡県礼楽之士、時相謁訪、喜聞其化、故四方学徒大集」とある。
- (10) 至若以書～無時無之…未詳。あるいは「年譜」淳熙15年（1188・先生50歳／501頁）条に「問拳経語為証。音吐清響、聴者無不感動興起」とあるのを踏まえるか。
- (11) 各隨其資～不拘於一藥…未詳。陸九淵が各人の資質にあわせて訓戒を与えていたことは、「年譜」淳熙15年（1188・先生50歳／502頁）条に「隨其人有所開発、或教以涵養、或曉以讀書之方」とある。
- (12) 莫不明白～感應神速…未詳。陸九淵の講説が痛快であったことは、「年譜」淳熙15年（1188・先生50歳／502頁）条に「每講説痛快、則顧傅季魯曰、豈不快哉」とある。

〔通釈〕

ご自身の学問の進歩について、（陸先生は自ら）次のようにおっしゃっている。（「与諸葛受之」に）「昔のことを省みるに、（自らに備わる）明らかなる善は、外界からメッキされたものではないが、いたずらに外物と交わっては弊害があるのだと、これより大いに恥じ入り、駄馬にむち打つように（己の愚鈍さを戒め励まして）、決して自暴自棄にはならなくなった。」（「年譜」に）「行動に途切れがなく純一であるというわけにいかなければ、しっかりと奮起することだ。そうすれば天地のようになれる。」（また「年譜」に）「（『論語』子路にいわゆる）「事を執るに敬む」は、かつて家事を任されていたときに大いに進歩した。」（また「年譜」に）「日用の修養（工夫）（をなすところ）は、まことに人情、物理、時勢のうちにある。」（「与致政兄」に）「努めて深く思索して、（物事の理）の詳細を究めていけば、必ず明白になって通じないことはなく、確固として移ろいゆくこともない。」これらの言を考えると、（陸先生は）学ぶことを厭わなかったといわなければならない。

学ぶ者たちを大いに啓発したことについて（陸先生は次のようであられたという）。（「年譜」に）「家塾には遠方の者も、近郊の者も評判を耳にして来学し、（陸先生のお教えが）琴線に触れた者の中には、汗を流す者もいた。」（また「年譜」に）「白鹿洞書院では、義と理をきっぱりと弁別し、それに心動かされた者の中には、涙を流す者もいた。」（また「年譜」に）「浙江（臨安）では、多くの英傑たちが従学し、みな（陸先生の）おことばを聞いて感動した。」（また「年譜」に）「象山書院では、ますます多くの学徒らが参集し、みな（陸先生の）お教えを聞いて敬服した。」（陸先生が）経書の章句に基づいて明らかにするとき、いつでもどこでも（学ぶ者たちが感服）しないことはなかった。各人の資質にあわせて切磋するのであって、いずれか一方にかかずらうのではない。各人の病状にあわせて治療するのであって、ある特定の薬石にこだわるのではない。（陸先生は）明瞭にして透徹、懇切にして痛快で、槍鋒が真っ直ぐに貫くように、刀刃が真っ二つに切り裂くように、人の心を開かせ、目を明らかにさせ、酔いを醒ますがごとく、眠りを覚ますがごとく、直ちに感化させる。これらの言を考えると、（陸先生は）教えることも懈らなかつたといわなければならない。

其畧陳於覲君之際也、輪對五篇、自幸稍盡所懷、天語甚詳、問答不敢不盡。至於遇合、付之天命。使得盡行其所言、則所謂將無愧唐虞之朝、於復三代乎何有。其言當酬矣、國家治道之興隆、豈特如乾淳而已哉。其小施於牧民之日也、昭示皇極、衆心曉白、治化所洽、久而益孚。農賈安恬、吏卒抑畏、盜賊衰息、訟牒希少、將及暮年、已至無訟。使得大其所施、則所爲躬行之效、在政刑號令之表者。將達之天下矣、豈特如荆門而已哉。以其年考之、惜乎天命不假之壽、天子未大其用、遂不得盡究其學。先是欲其學之行、故未著書、暨後方欲著書、亦卒奪其所志、可爲發千古之慨歎。

〔校異〕

a 其…李絳年譜、此の字無し。 b 將…李絳年譜、此の字無し。 c 無愧…李絳年譜、此の2字の後に「於」が入る。 d 乎…李絳年譜、「也」に作る。 e 孚…李絳年譜、「淳」に作る。 f 爲…静嘉堂本・宋人集本・李絳年譜、「謂」に作る。 g 達…李絳年譜、「得」に作る。 h 究…李絳年譜、「行」に作る。 i 其學…李絳年譜、「其所學」に作る。 j 先是～所志…李絳年譜、此の23字無し。

〔注釈〕

- (1) 輪對五篇…「文集」卷18、「刪定官輪對筭子」1～5 (221～224頁)を指す。なお「年譜」淳熙11年 (1184・先生46歳／496頁)条に「上殿輪對五筭」とある。
- (2) 自幸稍盡～付之天命…「文集」卷7、「与詹子南」2 (96頁)に「去臘面對、頗得尽所懷、天語甚詳、反復之間、不敢不自尽、至於遇合、所不敢必、是有天命、非人所与也」とある。
- (3) 將無愧唐虞之朝…「文集」卷18、「刪定官輪對筭子」1 (222頁)に「将見無愧於唐虞之朝」とある。
- (4) 於復三代乎何有…「文集」卷18、「刪定官輪對筭子」4 (223頁)に「有包荒之量、有馮河之勇、有不遐遺之明、有朋亡之公、於復三代乎何有」とある。
- (5) 昭示皇極…「文集」卷23、「荆門軍上元設序皇極講義」(283頁)を指す。なお「皇極」は、『尚書』洪範に見える語。「年譜」紹熙3年 (1192・先生54歳)条に「春正月十三日、会吏民講洪範五皇極一章」とある。
- (6) 治化所洽、久而益孚・將及暮年～號令之表者…「年譜」卷36、紹熙3年(1192・先生54歳)条に引く章穎 (茂猷)宛ての書簡 (511頁)に「先生治化孚洽、久而益著。既踰年、笞箠不施、至於無訟。……識者知其有出於政刑号令之表者矣」とある。また同条に引く周必大(益公)の傅夢泉(子淵)宛ての書簡 (512頁)に「曾通象山書否。荆門之政、如古循吏、躬行之效至矣」などとある。
- (7) 農賈安恬～訟牒希少…「文集」卷16、「与張元善」1 (210頁)に「今農賈安帖、吏卒抑畏、盜賊衰息、作則輒獲、訟牒之少」とある。
- (8) 暨後～其所志…「年譜」淳熙16年 (1189・先生51歳／506頁)に「寿皇内禪、光宗皇帝即位、詔先生知荆門軍。先生始欲著書、嘗言諸儒說春秋之謬、尤甚於諸經。将先作伝、值得守荆之命而不果」とある。

〔通釈〕

孝宗皇帝に謁見したときのことを略述した輪対（「刪定官輪対筭子」）5篇は、幸いなことに（陸先生）ご自身の心意をすこぶる尽くし、陛下のおことばもはなはだ詳細で、その問答に至らぬところはなかった。（陸先生が孝宗皇帝に）めぐり会われたことは、天命のなせるわざであろう。もしも（輪対で）述べられたことが、すべて実行されたならば、唐堯虞舜二帝の御代に遜色なく、夏殷周三代に戻ろうとも、何の不都合があるであろうか。もしも（輪対で）述べられたことが実現したならば、どうして国家治道が隆盛したのは、（陸先生が活躍された）乾道（1165～1173）、淳熙年間（1174～1189）のみであったということになるであろうか。

細々と民衆の統治にあたられていた日々において、（陸先生が）いささか奮闘されたのは、（湖北荆門の地において）（『尚書』洪範にいう）「皇極」を示されたことである。そこで民衆の心は明白となり、またあまねく教化され、久しくしてますます誠実となった。農民や商人は安定し、いっぽう役人は畏服し、盗賊は衰退して、訴状が出されることも稀になり、一年を通して訴訟がないこともあった。もしも大々的に任にあたられていたならば、（陸先生が）なされた実践の効用は、行政や司法の命令としてあらわれていたことであろう。これを天下に行き渡らせることがあったならば、どうして荆門のみであったということになるであろうか。

年月を考えると、残念なことに（陸先生は）天命たる寿命も短く、天子からも重用されず、とうとう学問を究め尽くすこともできなかった。はじめ学問が実行されることを望んだために、著作を残すこともなく、のちに初めて著書を執筆しようとしたときには、結局志を奪われてしまった。これは永久に慨嘆を発すべきであろう。

惟其言論風旨、學者求之、則自有餘師也。然某嘗隱憂遺慮爲、言先生之學者雖多、究先生之學者似少。夫學者、門也、路也。知所從入之門、則必知內有堂室之深。知所從入之路、則必知前有千萬里之遠。先生以學者茫茫、如在門外、如在路傍、而莫知所從入、其誤認以爲門、爲路、而誤入者尤多。故其教多先指其所入以示之、乃發足第一步也。由是而之焉、方將循以導其進於深達之地。誨言具在、皆可覆也。如自知學入、凡五進而極於從心。自欲善入、凡五進而極於聖神。極深則有宗廟百官之美富、悠遠則有博厚高明之配合、此先生之深遠處也。苟或升而未入於室、畫而遂廢於中猶不可、況今有近於入門入路一步之初、遽止而不復進步、豈先生之學哉。抑嘗記先生之詩乎、涓流積至滄溟水、拳石崇成泰華岑。先生、滄溟泰華也。學者或止涓流拳石、而未知有積至崇成之功。用是故有以徑捷超入之法妄加橫議、而亦莫有能破其橫議之說者、非先生之負學者、實學者之負先生也。是其可不謹思而明辨哉。年譜雖明備、又在善學者志其深者遠者、而自強不息以終之、庶乎不負於所學、不忝於先生。是區區切有望於同門云。

〔校異〕

a 某…李紱年譜、「恢」に作る。 b 嘗…文淵庫本・李紱年譜、此の字の後に「妄有」が入る。
 c 爲…文淵庫本、「焉」に作る。 d 門也、路也…李紱年譜、「路也、門也」に作る。 e 在
 門外…宋人集本、「在在門外」に作る。 f 爲路…李紱年譜、此の2字の後に「以」が入る。
 g 循…文淵庫本、「循循」に作る。 h 導…静嘉堂本・李紱年譜、「道」に作る。 i 達…
 文淵庫本・宋人集本、「遠」に作る。 j 覆…李紱年譜、「觀」に作る。 k 知…文淵庫本・
 宋人集本・李紱年譜、「志」に作る。 l 極…李紱年譜、「弘」に作る。 m 先生…静嘉堂本、
 「生先」に作る。 n 入…李紱年譜、「至」に作る。 o 況今…李紱年譜、此の2字の後に「僅」
 が入る。 p 近…李紱年譜、此の字無し。 q 入門…李紱年譜、此の2字無し。 r 拳
 …李紱年譜、「卷」に作る。 s 止…静嘉堂本・宋人集本、「至」に作る。 t 拳…李紱年譜、
 「卷」に作る。 u 之之功…文淵庫本・宋人集本、「之功」に作る。 v 故…李紱年譜、「致」
 に作る。 w 之…李紱年譜、此の字無し。 x 亦…李紱年譜、此の字無し。 y 切…李
 紱年譜、「竊」に作る。 z 云…李紱年譜、此の2字の後に「寶祐丙辰仲冬朔、後學包恢
 拜手敬書」が入る。

〔注釈〕

- (1) 自知學入～極於從心…『論語』為政に「子曰、吾十有五而志于学、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲不踰矩」とあるのを踏まえる。ここで「五進」とあるのは、①「志学」から「而立」、②「而立」から「不惑」、③「不惑」から「知命」、④「知命」から「耳順」、⑤「耳順」から「從心」と、五段階の進歩を経ることを指す。
- (2) 自欲善入～極於聖神…『孟子』尽心下に「可欲之謂善、有諸己之謂信、充實之謂美、充實而有光輝之謂大、大而化之之謂聖、聖而不可知之之謂神」とあるのを踏まえる。ここで「五進」とあるのは、①「善」から「信」、②「信」から「美」、③「美」から「大」、④「大」から「聖」、⑤「聖」から「神」と、五段階の進歩を経ることを指す。
- (3) 宗廟百官之美富…『論語』子張に「夫子之牆數仞、不得其門而入、不見宗廟之美、百官之富」とあるのを踏まえる。
- (4) 博厚高明之配合…『中庸』に「不息則久、久則徵、徵則悠遠、悠遠則博厚、博厚則高明。博厚、所以載物也。高明、所以覆物也。悠久、所以成物也。博厚配地、高明配天、悠久無疆」とあるのを踏まえる。
- (5) 涓流積～成泰華岑…淳熙2年(1175・先生37歳)、陸九淵と朱熹との初の直接対決となる、いわゆる鵝湖の会に際して詠まれた七言律詩の頷聯。同行した五兄、陸九齡が詠じた詩に次韻したもの。「文集」巻25、「鵝湖和教授兄韻」(301頁)に「墟墓興哀宗廟欽、斯人千古不磨心。涓流積至滄溟水、拳石崇成泰華岑。易簡工夫終久大、支離事業竟浮沈。欲知自下升高處、真偽先須弁只今」とある。また「語録」上・203条(427頁)にも採録される。

(6) 謹思而明辨…『中庸』に「博学之、審問之、慎思之、明弁之、篤行之」とあるのを踏まえる。原文に「謹」とあるのは、孝宗皇帝（在位1162～1189）の諱「昀」（「慎」に通じる）を避けたため。

(7) 自强不息以終之…『周易』乾・象伝に「天行健、君子以自彊不息」、「知終終之、可与存義也」とあるのを踏まえる。

〔通釈〕

思うに言論や風格を、学ぶ者が求めるにあたっては、もとより有り余るほど多くの師がいる。けれども私が常日ごろ人知れず憂慮しているのは、（陸）先生の学を語る者は多いが、先生の学を究める者は、どうやら少ないということである。いったい学とは、門であり、道である。入口となる門を知れば、必ずその内には、奥に堂室が広がっていると分かるし、入口となる道を知れば、必ずその先には、遥か千万里が続いていると分かる。（陸）先生は、学ぶ者には、茫然として門外にあるがごとく、道端にあるがごとく、入口がどこだか分かっていない者や、誤ったところを門や道だと思い込み、勘違いしてそこに入ろうとする者が、とりわけ多いと考えていた。それゆえ（陸先生の）お教えも、まずは入口を指し示すことが多かったが、それは足を踏み出す第一歩である。そしてそこから順序通りに、深遠通達なる境地へと進むよう導いていた。（陸先生の）訓戒は（入口を指し示すのみならず、深遠通達なる境地までもが）具さに備わっているのであるから、その全てに目を行き渡らせるべきである。

（『論語』為政にいう）「学（に志す）」を入口として、およそ（「而立」、「不惑」、「知命」、「耳順」を経て）五段階の進化を遂げれば、「従心」（心の欲する所に従ひて、矩を踰へず）に至る。（『孟子』尽心下にいう）「欲（すべきを之れ）善（と謂ふ）」を入口として、およそ（「信」、「美」、「大」を経て）五段階の進化を遂げれば、「（大にして之を化するを之れ）聖（と謂ふ）」や「（聖にして之を知るべからざるを之れ）神（と謂ふ）」に至る。この上なく深いところに、素晴らしい宗廟や盛んな役人たちの姿があり、遥かに遠いところに、天地と並び合う広大さや高明さがある。これが（陸）先生のいう深遠なる境地である。足を踏み入れながらも、まだ堂室には至っていない、計画しながらも結局、途中でやめてしまう、このようなことですら不可である。ましてやいま入門第一歩の当初において、いきなり立ち止まって、これ以上進歩のない者がいるが、これがどうして（陸）先生の学であろうか。そもそも（陸）先生の詩には、「涓流積みて滄溟の水に至り、拳石崇くして泰華の岑を成す（ちよろちよろとした流れが合わさって大海となり、拳ほどの小石が積み重なって泰山や華山のような大峰となる）」とある。（陸）先生は「滄溟」「泰華」であるが、学ぶ者たちには「涓流」「拳石」で立ち止まってしまい、「積み至る」ことや「崇くして成る」ことの効用を知らない者もいる。それゆえ抜け道や飛び越えなど、やたらと邪まな議論を立てるばかりで、こういった議論を論破できる者もないのである。（陸）先生が学ぶ者たちに背いているのではなく、その実、学ぶ者たちが（陸）先生に背いている。慎ん

で思慮し、明らかに弁別しないではいられまい。「年譜」は明らかにして備わってはいるものの、さらによく学ぶ者たちは、深遠なところに志を向け、自ら努めて止むことなくやり遂げれば、ほとんど学に背かず、(陸)先生に恥じ入ることもないであろう。以上、私めが同門に切望することである。

3. 「跋象山先生二帖」精読

跋象山先生二帖

象山先生之學至明至實^a、粹然一出於正、而知之者鮮。或有妄加疑議者、異哉。姑以所與先伯叔二帖觀之、如曰、學無他繆巧⁽²⁾、但要理明義精^b、動皆聽於義理、不任己私耳。至有言、其人酒後言動殆不可考⁽³⁾、顛狂禪語不可已訓^d、則截然不掩其瑕而恕其罪、概可見矣。世之號爲學者、其弊非流於顛狂則入於繆巧而不自知也、而反敢致疑議於先生、此實某之所未解。抑先生嘗曰、心乃天下之同心⁽⁴⁾、理乃天下之公理⁽⁵⁾。同此之謂同德、異此之謂異端。顏子從孔子、不秘孔子之門戶。至哉言乎。彼苟私門戶之陋者、固不必與之辯矣。或者源流自先生而浸失其傳者、方不免顛狂繆巧之病、其不爲先生之累者幾希、其實深憂之。有能即其此理誠明⁽⁶⁾、踐履不替、則氣質不美者無不變化之說、而求之、庶乎有時自知而可以知先生矣⁽⁷⁾。吳氏子汝弋素喜學、故先君子授以是帖。經寇燬、能寶藏不失墜。一日示某、謂將刻之以詔後學、予不揆、僭及其本末如此以歸之云。

〔校異〕

a 至…文淵庫本、「且」に作る。 b 義…静嘉堂本、此の字の後に「勤」が入る。 c 義理…宋人集本、「理義」に作る。 d 已…文淵庫本・静嘉堂本・宋人集本、「以」に作る。

〔注釈〕

- (1) 所與先伯叔二帖…陸九淵が包恢の伯父包約(詳道)と叔父包遜(敏道)に宛てた書簡。「文集」巻6に「与包詳道」(全7通／80頁)と「与包敏道」(全4通／85頁)を、巻14に「与包詳道」(全1通／182頁)と「与包敏道」(全2通／182頁)を収める。
- (2) 学無他～己私耳…「文集」巻14、「与包敏道」1(182頁)に「学無他繆巧、但要理明義精、動皆聽於義理、不任己私耳」とある。
- (3) 其人酒後～恕其罪…「文集」巻6、「与包詳道」7(84頁)に「但頗有言其酒後言動、殆不可考。吾家長上亦罪其顛狂。又有詩偈類釈子語、不可以訓。要之、瑕瑜功罪各不相掩」とある。
- (4) 心乃～天下之公理・顏子～孔子之門戶…「文集」巻15、「与唐司法」(196頁)に「学者求理、当唯理之是從、豈可苟私門戶。理乃天下之公理、心乃天下之同心、聖賢之所以爲聖賢者、不容私而已。顏曾伝夫子之道、不私孔子之門戶、孔子亦無私門戶、与人爲私商也」とある。
- (5) 同此之～謂異端…「文集」巻1、「与邵叔誼」(1頁)に「同此之謂同德、異此之謂異端」とある。

(6)此理誠明～變化之説…「文集」卷14、「与包敏道」1(182頁)に「此理誠明、踐履不替、則氣質不美者、無不變化」とある。

(7)呉氏子汝弋…未詳。ひとまず呉弋としたが、あるいは呉弋素であろうか。

〔通釈〕

跋象山先生二帖

陸九淵(象山)先生の学は、この上なく明白、この上なく堅実で、ひたすら正大なるところからあらわれたものであるが、これを知る者は少ない。あるいはやたらと疑わしい議論を立てる者もいるが、何とも間違っている。ここで(陸先生が)伯父(包約)と叔父(包遜)に宛てた二通の書状を見てみると、例えば(「与包敏道」に)「学というのは、他にいつわりもうわべもない、理が明白で義が精密であることを求める。行動するときにはみな義理に耳を傾け、己がままにならないようにするだけだ」とあり、(また「与包詳道」に)「(聞くべき)ことばがあったところで、その人の酒席での言動など考えるに堪えず、錯乱して発した禅語などもはや読むに堪えないのであるから、毅然として(酒席の戯言や禅語といった)欠を隠して罪を許すなどしないことだ」とあるが、これらからおおむね分かるであろう。世に学問と呼ばれているものの弊害は、狂乱に流れるのでなければ、いつわりやうわべばかりで、しかもそれを自覚していないことにある。それなのにあえて(陸)先生に対して疑わしい議論を立てるとするのは、私にはまことに理解できないことである。

そもそも陸先生は、かつて「心は天下の同心で、理は天下の公理である」、「同じくすることを同徳といい、異にすることを異端という」、「顔子は孔子に従学したが、孔子の門戸を秘匿しなかった」といったが、これらは至言である。門戸を私物化するような輩とは、もとより議論する必要はない。また(陸)先生(の学問)に淵源を持ちながら、その学統を失ってしまっている者もいるが、彼らは狂乱やいつわり、うわべの病弊から免れられず、先生に累を及ぼさない者は少なく、まことに深く憂慮させられる。(「与包敏道」にいう)「この理が誠に明白で、実行することを止めなければ、氣質がよくないものであっても、変化しないわけにはいかない」の説に即して、これを求めていけば、あるとき自覚して、(陸)先生を知ることができるであろう。

呉弋(子汝)は平素より学問を好み、それゆえわが父(包揚)よりこの書状を授かった。外敵が火を放とうとも、宝蔵していれば失われぬ。ある日(呉弋は)私に示して、これを刊刻して後学を導くようにいった。私は図らずも、僭越ながら刊行の本末について、以上のように言及した。

4. 「陸象山先生贊」精読

陸象山先生贊

高明英特、所立之卓⁽¹⁾。沈潛慎密、所守之約⁽²⁾。彼之所學者⁽³⁾、告子之外。此之所學者⁽⁴⁾、孟子之内。外者皆虚、説誣而徒塞乎仁義。内則皆實、光大而可入乎聖智。不差毫釐而一是之歸同、無過不及而一中之渾融。嗚呼、若先生者、真可以進乎夫子⁽⁵⁾皜皜莫尚之明。而世之妄肆瑕疵者、亦何足以傷玉氣貫虹之精哉⁽⁶⁾。

[校異]

a 慎…文淵庫本・静嘉堂本・宋人集本、「續」に作る。

[注釈]

- (1) 所立之卓…『論語』子罕に「夫子循循然善誘人、博我以文、約我以礼、欲罷不能。既竭吾才、如有所立卓爾」とあるのを踏まえる。
- (2) 所守之約…『孟子』尽心下に「言近而指遠者、善言也。守約而施博者、善道也」などとあるのを踏まえる。
- (3) 彼之～告子之外…「彼」は未詳。あるいは陸九淵の論敵である朱熹を指すか。ただし管見の限り、陸九淵が「告子」の語をもって、朱熹を批判したという例は見えない(逆に朱熹は、陸九淵に対して「其学正似告子」(『朱子語類』卷124・14条、潘植録)といい、またその死に際しては「可惜死了告子」(同卷124・48条、湯泳録)と述べている)。
- (4) 此之～孟子之内…「此」は陸九淵を指す。陸九淵が孟子を尊崇していたことは、例えば「語録」下・338条、詹阜民録／471頁(「年譜」淳熙12年(1185・先生47歳)条とほぼ同一記事／498頁)に「某嘗問、先生之学亦有所受乎。曰、因説孟子而自得之」とあり、また「文集」卷11(「与路彦彬」／134頁)にも「区区之学、自謂孟子之後至是而始一明也」とある。
- (5) 夫子皜皜莫尚之明…『孟子』滕文公上に、曾子が孔子を評して「江漢以濯之、秋陽以暴之、皜皜乎不可尚已」というのを踏まえる。
- (6) 玉氣貫虹…「玉氣」は清らかな氣、「貫虹」はいわゆる「白虹貫日」(白い虹が太陽をつらぬき通す、すなわちまごころが天に通じることをいう)の故事を指すか。例えば王炎(1137～1218)の七言古詩「送徐尉移簿巴陵並簡鄧器先汪兼善」には「令君錦衣織青鳳、先生玉氣貫白虹」などとある。

[通釈]

陸象山先生贊

その高明にして英傑なるさまは、そびえ立っておられるかのごとく、その深遠にして丁重なるさまは、約やかを守られているかのごとくである。あちらの学ぶところは、告子の外面であるが、こちらの学ぶところは、孟子の内面である。外面はみな虚であり、偽言を説いていたずらに仁義を塞いでしまう。内面はみな実であり、光大にして

聖智に到達することができる。わずかも違わず、たった一つの正しさへと回帰し、過不及なく、たった一つの中心へと融合する。ああ、(陸)先生は、まことに孔夫子の「真つ白で (これ以上白さを)加えられない」明白さへと進まれた。世の妄りに瑕疵をほしいままにする者たちも、どうして (陸先生の)清らかな気が (白)虹となって (太陽を)つらぬき通すほどの精一さを傷つけることができようか。

5. むすび

さて以上、包恢の文集『敝帚稿略』の中から、直接陸九淵に言及した「象山先生年譜序」、
「跋象山先生二帖」、
「陸象山先生賛」の三篇の文章を精読してきた。以下、これらの基礎的作業を通じて明らかになった、今後の包恢研究、陸九淵後学研究に資すべき事項を挙げておきたい。

(1)「年譜」編纂者・李溥

「象山先生年譜序」では、その冒頭で「年譜」刊行の顛末が述べられるが、そこでは「年譜」編纂者として李溥 (子原)の名が挙げられている。この李溥は、生前包恢の父包揚に師事し、その死に際して、包恢が墓誌銘を寄せるなど、包父子と関係の深い人物であった。このような人物が、陸九淵研究の基礎資料である「年譜」編纂の立役者であったことは、周知されるべきであろう。

(2)当時の陸九淵に対する評価

「象山先生年譜序」では、「以其言考之、可謂学不厭矣」や「以其言考之、可謂教不倦矣」と、陸九淵自身のことばが引かれつつ、彼が学問や教育に邁進してきたさまが描かれる (本稿90頁)。これは逆にいえば、包恢がこのように主張しなければならないほど、当時にあっては、陸九淵が学問や教育を軽視したと見なされていたということであろう。

(3)包恢の陸九淵に対する評価

「象山先生年譜序」では、陸九淵について「其教多先指其所入以示之」と述べられるが、さらに「有近於入門入路一步之初、遽止而不復進歩、豈先生之学哉」と続く (本稿94頁)。陸九淵は常日ごろ学問の入口を教示していたが、もとよりそこで完結せず、その後のさらなる進歩も求めていたというのである。

すなわち陸九淵自身に、進歩を求める姿勢があったことを確認し、そこから当時一般的であった、学問や教育を軽視した陸九淵像の見直しを図ることが、包恢の意図するところであったといえるであろう。

Abstract

Bao Hui 包恢 in the Nan-Song 南宋 Dynasty is famous as a Zhu-Lu 朱陸 eclectic philosopher. *Bizhougaolüe* 敝帚稿略: the collected works of Bao Hui has three pieces of writing: *Xiangshan Xiansheng Nianpu Xu* 象山先生年譜序, *Ba Xiangshan Xiansheng Ertie* 跋象山先生二帖, *Lu Xiangshan Xiansheng Zan* 陸象山先生贊 which referred to Lu Jiuyuan 陸九淵's thought directly. This paper focused on these writing, and investigated Bao Hui's evaluation of Lu Jiuyuan.